

材木屋とエコ 環境 省エネ(第72回)

JR東日本 小海線(信州高原鉄道) 三岡駅

(株)コバリン 奥澤 康文

【小諸へ出張】 9月1日(金)、期末棚卸の為、当社小諸チップ工場へ。午前8時、新幹線で佐久平駅下車、天候に恵まれ早目に終了。午後1時の新幹線で東京へ戻る。昼休みに、小海線の三岡駅(当社工場から道路を挟んで約30m)付近を散策後、改めて地域環境を知る。

小海線は、佐久鉄道が1915年、長野県小諸市⇄山梨県北杜市間の全長79km開通。三岡駅(現在は無人駅、標高705m)は、1925年に出来た。JR線では、日本で最も標高の高い野辺山駅(標高1345m)を走る高原鉄道の為、今年7月から、観光列車「HIGH RAIL 1375」が運行し、評判を呼ぶ。

会社OBの話では、現在とは異なり、「昭和30年代、当社工場で生産した木材チップをベルトコンベアで国道地下を潜り、引込線の貨車に積載し、製紙工場向けに出荷していた」との事。(尚、Wikipediaで、「三岡駅」に、往時のチップ搬送状況が掲載されており驚いた。)



三岡駅。利用者は、約150人/日。電車は時間当たり1本人影はありません。無人駅ですが、花壇や施設は手入れが行き届いているので感じがいい。



待合室の頑丈な木の椅子。木の感触が素朴で温かい。待合室もシンプルで快適。腰を下ろすと、ふわーっと気持ちや和らぎますね。



南は佐久平方面。傍には、地元の大手の佐久通運(日通)の事務所、トラック置き場。湿度が低く、爽快。静かな夏(初秋?)の午後でした。



北は小諸方面。鉄道に平行して県道が走っている。当社工場は国道沿いの右側。ややカーブし、交通量も多い為、安全な歩道橋を使うと便利。



駅前の花壇に、秋の花が咲いていました。特に、黄色の彼岸花がきれいでした。雑草の様な植え込みですが、素朴でいい感じ。夫々に、名前があるのでしょうか、わかりません。



駅前の有名なそば屋さん。入り口、表側は、木材で落ち着いた雰囲気を醸し出している。最近、都市部でもこの種の木材使用が増加中。古き良き昭和を思い出させてくれ、良い傾向だと思う。



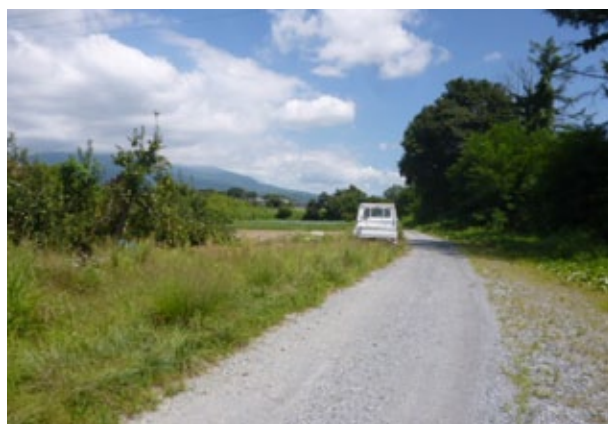
駅の南西方面には、狭い水田が広がる。周囲より低く、昔は川が流れていたのだろう。緑豊かできれい。緑を見ると視力が改善した様な気分。有名な観光地まで行かなくても、この辺でも十分。



旧国道上の歩道橋を渡り、駅の東側へ。高いけど、子供からシニアまでも安心して横断できる。まるで、クモの巣みたい。隠れた観光スポット？ 眺望がよく、鉄道、国道、周辺の環境が良くわかる。



歩道橋を降りると、集落、小学校がある。静かで、住みやすそう。東京まで1時間半の長野県は、シニアのリタイア組には人気がある。又、佐久から東京まで通勤している人もいるようだ。



少し行くと、砂利道と田園風景が続く。高い青空にぽっかり浮かぶ白い雲を見ると、懐かしい半世紀前の故郷にタイムスリップ。長野県は、男女の平均寿命が日本一。食事と環境かな？



チップ工場では太く立派な丸太も入荷。直径30～50cm（樹齢も30～50年）。針葉樹、広葉樹から出る樹液（ヤニ）が独特な芳香で、気持ちが安らぐ。人間だけでなく、昆虫類も集まってくる。



昆虫や蟻を狙って、ツバメや多種の野鳥が集まり駆除してくれる。最近、話題の火蟻とは違い、地元固有種の黒蟻です。野鳥の目で見ると、丸々とした体長1.5cmの蟻は美味しそう…かな？



工場の敷地内に、収穫間際の大きな栗の木がある。イガグリを見るのは久しぶり。子供の頃、秋が待ち遠しく、自然のおやつだった。自宅の裏山の栗を鍋で蒸かして食べたことが懐かしい。



1ヶ月前に見た胡桃が熟しつつある。稲作文化の伝播前の縄文時代は、栗や胡桃等の木の実が主食。埼玉県立博物館で当時の遺物を見たことがある。他には、動物、魚類、貝類等も重要だった。

【終戦から72年、日本はどうなるのか?】 長野県の緑豊かな自然の中では、都会の雑踏を忘れる。さて、スポーツでは、米国PGAで活躍中の松山英樹が優勝。サッカーでは、2018年、ロシアW杯の出場が決定。水泳、新体操、卓球、柔道等でも日本人の活躍が目立った。又、桐生選手が100mで、「日本人初 9.98秒」の号外が出た。Tokyo 2020に続き、Paris 2024、L.A. 2028が決まった。

ところで、日本周辺の安全保障面では、異常な緊張・不安が増大、軍事的なパワーバランスが崩れつつある。8月15日晚、某テレビ局が80年前の旧日本軍の戦況を報じた為、少々案じた。翌日、早速、他国から批判噴出。今更、敢えて全世界へ発信する必要があるのか疑問を感じた。9月1日（金）午前6時、朝食中に、テレビ内からJアラートが鳴り響き、一時、マスコミや国民が騒然となった。依然、不安定な状況下だが、平凡・平穏な日常が続くことを願うしかない。

2017年9月17日（日） 記